

『平家物語』構想論のために

——「得長寿院供養事」をめぐって——

山下 宏 明

戦後の中世文学論において大きく脚光を浴びた『平家物語』も、ようやくその評価をめぐって再検討がなされつつある。その詳細については『シンポジウム 平家物語』⁽¹⁾に譲るが、一口で言って、現在は、『平家』の成立をめぐって、作品がいかなる作品であるかの実態認識に課題が集約されつつあると言ってよいだろう。すなわち、まず、戦後の、叙事詩論的研究と言える『平家』論の対象となった覚一本の再検討がなされたし、何よりも原『平家』を現存諸本のいずれに想定するかをめぐって論争が活発になされた。⁽²⁾そうした中で延慶本や長門本の読みが深まりつつあり、⁽³⁾この延慶本をめぐる原態論争から、物語本来の主題が何であるかが改めて問われようとしていると言ってよいだろう。勿論、その主題論をめぐっては、いかなる形態を原態と見られるか問われるはずで、その原態論の如何によって、その主題論も多様化する。それらを大別すると、物語を一種の歴史文学として見る論と、唱導文学として見る論とに大別されるだろう。もっとも、現実の『平家』には、実は両側面をともに有していて、そのいずれかに主題を限

定するのが無理というものであろうが、しかも現存する多様な諸本のいずれに原態を想定するかによって、その主題論は大きく変わって来るはずである。これまで、いずれかと言えば、歴史文学と見る見方が強かったと言ってよからうが、近く、水原 一氏の説話形成論を契機として、延慶本を中心とする読みから、唱導に重きを置く主題論が見え始めている。今後、各諸本に即しての読みが深まるにつれて、主題論は、更に多様で緻密なものになって行くであろう。

二

この主題を究める当然の課題として、物語が何を、どのような叙事展開をたどりつつ書かれて行ったかという構想論からの照射が必要であろう。戦後の『平家』論の主流をなした評価とは別様の、『平家』をいかなる作品として読むかがかわる形での、新しい評価の問題が期待できるであろう。前掲の『シンポジウム』を通して感じた、将来の課題も、実にこの期待につながる。

簡単な問題から出発しよう。物語は、一体、何年にわたる時代をそ

の対象とするのであろうか。富倉徳次郎氏による詳細な『平家物語』歴史年表によると、物語の主要構想にのっかかる部分⁽⁶⁾は、長承元年(一一三二)の得長寿院落慶、忠盛昇殿に始まり、建長九年(一一九八)、六代御前が処刑される約六十年にわたる期間と見てよい。しかも、その中、安元三年(一一七七)の京都の大火まで約四十年を巻一におさめ、以後、元暦二年(一一八五)の大地震までの、十年にも満たぬ年数を実に巻二から巻十一までの、物語の大半を費して描いている。この年数の配分からも、物語が平氏の滅亡を重点的に描いていることは明らかである。ところでそうした重点的な課題が、はたして執筆当初から構想されたものかどうか。現在までのわたくしの読みでは、この点いささか否定的である。かりに、そうした構想が当初から志向されたものであったとしても、これを巻二以後へどのように結び付けて行ったか、そうした物語冒頭部分のあり方が、時代の転換をとらえる上でどのように有効であったかを他の文学作品との比較のもと究めねばならない。そうした意味で、物語が対象とする約六十年の中、四十年もの永い期間を、量的にはバランスを欠いて一巻に圧縮して描きこめる巻一の構想を探ることが不可欠の作業となろう。それに、この巻一からして、諸本の間に記事に繁簡の差があり、さしあたり構想論の上から、この巻一のあり方を究めることが、続く巻々の諸本の異同の意味を推測する手がかりをも与えるはずである。

三

巻一の冒頭から諸本の異同が烈しく、原態『平家』に物語執筆当初の主題を探ろうとする立場からは、たちまち、いずれの本文によるべきかが問題となる。巻頭でも、いわゆる序章の部分については、ほとんど異同がない。しかも、延慶本(長門本)には、開巻早々、

……平治ニ信頼驕ル心モ猛キ事モ取々ニコソ有ケレトモ遂ニ滅ニキ縦ヒ人事ハ詐ト言トモ天道詐リカタキ者哉王麗ナル猶如此况人臣位者争カ慎マサルヘキ間近ク大政大臣平清盛入道法名浄海ト申ケル人ノ有様
 伝承コソ心モ詞モ及ハレネ

という、他の諸本には見らぬ本文が見られる。延慶本は、天道観を基盤とする儒教的批判性を濃く見せていて、その序章に見られる主張がおそらく以下物語の全編を規定しているものと想像される。しかし、さし当って問題にすべきは、この後、忠盛が鳥羽院の御願により造進した得長寿院をめぐって、その落慶供養に関する詳細な記事が延慶本・長門本に存在すること、またこれら両本にかかわりがあると思われる記事を源平盛衰記が有することである。この供養当日の記事を有する形態を物語当初の形態と考えるかどうか、物語の成り立ち、ひいては主題を大きく決定する。『平家』の評価を目標に、その物語の成り立ちを構想論的観点から検討しようとする場合、まずこの得長寿院供養の事の記事の処理が必要となる。

ところで、問題の落慶供養の説話を検討しようとする場合、これを有する延慶本・長門本・源平盛衰記のいずれを、その『平家』にとり

込んだ当初の形と見るべきであろうか。迂遠にはなるが、構想論のためには、まずこの事から究めねばならない。この点について、問題の得長寿院落慶供養説話とかかわりながら問題提起された先学の成果がある。渥美かをる・赤松俊秀両氏の御論である。以下、まずこの両先学の論を概観しておこう。

渥美氏の第一論考「説話形成についての二考察——平家物語長門本の得長寿院供養譚をめぐって——」（『文芸研究』42 昭和三十七年九月）は、まず、文体の面から民間流布のままの説話を収めるものとして長門本をとりあげ、この架空的説話が現実の供養の次第の直後に作られるはずはないとし、得長寿院が元暦二年（一一八五）の大地震に倒壊、蓮華王院に合併された当時に問題の落慶供養説話の成立を想定、『今昔物語集』『古事談』に見える東大寺落慶供養の説話に示唆を受けたとする。そして十二・三世紀の頃、諸寺供養の全盛期に痲瘡が流行したのを契機に、この時期に薬師の靈験譚を付加、その後、さきに得長寿院を合併した蓮華王院が建長元年（一二四九）の大火に類焼、文永三年（一二六六）に再興、その落慶供養が行われ、この過程で説話が成長、供養当日、蓮華王院の僧により披露されたものとする。この論は、供養の導師として自薦して出た十三人の僧の素性を検討したこと、説話形成を促した状況を考察した点に成果が見られる。続く赤松氏の「得長寿院落慶供養について——平家物語の原本について続論——」（『文学』昭和四十三年十月）は、延慶本に原『平家』の形態を想定する論の一環となされたものであるが、得長寿院供養

に関する史実を探り、長承二年四月十五日、前斎院恂子のオコリ病がこの千体観音堂の靈験により快癒した事実注目し、問題の説話は、この供養の直後に虚構を以て成立したものと見て、前の渥美説と対立を示した。そして問題の説話において無名の貧僧が突如出現して導師をつとめたとの虚構を支えるものとして、当時、慧星の如く現れた覺鑊の記憶が、説話形成の契機をなしたとする。この論文の特色は、説話形成の背景となった事件を、『中右記』の読みを通して探り、渥美氏の言う、元暦二年の大地震により得長寿院を蓮華王院に合併したとするのが当たらないとするなど、史料の読みにより史実を確認した所にある。ただ、説話の成立を供養の直後に想定すること、その想定根拠として、前斎院恂子の快癒譚をのせる長門本を当該説話の先行形態とすること、説話形成の直接の契機を覺鑊の登場に求めること、などに、なお論証がほしいように思われる。それに、この説話を有する形態を原態と判定するその根拠として、十二巻本がこの説話を省略したわけを、早くこれを秘事として扱ったからであろうとし、しかも十二巻本当時、すでにこの靈験の記憶が薄れたかとする。秘事とすること、靈験の記憶が薄れたこととはどのように結び付くのであろうか。なお、それに語り系諸本では、むしろ時代が下って室町時代の如白本などがこれを載せて秘事としている事実があるが、これをどのよう理解すればよいのであろうか。

渥美氏の第二稿「延慶本平家物語の特殊な性格——ぬきさしならぬ重要な説話の存在について——」（『説林』23 昭和四十九年十二月）

は、前の第一稿が長門本を当説話の先行形態と見たのに対し、延慶本の編者こそ、この説話を重要な説話として判断したもので、延慶本においては、忠盛が得長寿院を造進したその利生により昇殿、一門の榮華をも果したとする。これが長門本では、問題の説話の意味付けの部分を欠落、当説話を補った当初の意味を見失っているとして、これらの意味付けを厳密におさえている延慶本においてこそ、この説話がぬきさしならぬ重要な意味を有するのだとした。

この説話の形成の意味は今おくとして、これら先学の成果を踏まえ、延慶本・長門本・盛衰記のいずれに当説話採取当初の形態を見るべきであろうか。

四

まず、三本の中で特異な源平盛衰記を見てみよう。

盛衰記によれば、当初、落慶供養は、長承元年二月十六日に予定されていたのが、大雨などのわざわいにより順次延引、結局三月十三日に施行されることになったと言う。問題の供養の儀については、前の赤松氏の論考に見るように『中右記』に詳しい。今この『中右記』によって見ると、同年二月二十一日の午后、雷鳴を伴う雨の降った事実が記録に見えるが、そのために供養の儀が延引された事実は見られない。三月十三日に、忠尋僧正を導師とする儀式のあったこと、およびその次第は、盛衰記の描く所が史実に合致する。更に、当日の導師祈願の文句に「衆病悉除身心安楽」とあった、その声が洛中に響き、お

りから瘡を病んでいた斎宮女御がこれを耳にして忽ち平癒、その時、辺土・洛陽の二万三千人の病が癒えたため、異名を平癒寺と称したことを言う。この斎宮女御平癒の話は長門本にも見え、長門本との何らかの関係を思わせる。前掲赤松氏の論考は、この大宮女御快癒の虚構のネタになった前斎院恂子の病平癒、それに宗忠の下女が同じく当院への参拝行道により病の快癒したことを、この説話の形成の核に想定するものであった。ところで盛衰記は、延慶本・長門本の当説話の核心をなす貧僧が導師をつとめた話が説話としてのせられていない所に特色があるが、しかもこれを盛衰記は、この話の末尾に、別記形式を以て、

異説には、二宮地主権現の非人と現じて、日光月光、十二神將を相具して、説法と言ふ事あり、僻事にてありけるか

と付記している。日比野和子氏によれば、この別記形式はその大部分が盛衰記の編纂当初からこの形式を以てなされたものであり、そこには編者の客観的、冷静な態度がうかがわれると言う。盛衰記編者は、おそらく貧僧をめぐる説話の存在を『平家』の本文として知っていたはずで、しかもこれを史実(史料)に照らして「僻事」と批判する冷静な目を持ったわけである。その姿勢は、物語を享受するというよりは、史実に照らして裁断するもので、前述の、本書のみが史実通りに忠尋を導師として盛儀を行ったことも、この盛衰記編者の一貫した態度のあらわれと見られる。いずれにせよ、当面、落慶供養そのもののあり方を問題とする以上、この盛衰記は考察の対象からは、は

ずして考えてよいであろう。

残る問題は、延慶本と長門本のいずれが、本説話を『平家』に採り込んだ当初の形を伝えるものと考えるかである。

長門本の、延慶本と異なる大きな違いとして、まず、長門本には供養の日どりが決定後、雨のために延引となったことを記す。この点については、盛衰記を検討する際に指摘したように、その事実を史料に確認し得ない。史実であったかどうかはおくとして、延慶本には見られない、この数度にわたる延引の事実をなぜ必要としたのであろうか。現在のところ不明とする外はない。

次に、長門本は、供養の儀が終了した後、その布施が積み置かれ、それが「山のうごくがごとくぞありける」とした後、

御布施はむへんのくどくとなれとて、非人どもに給はりにけり。

御だう師身にさうおうするほどの御ふせにこそあづかるべく候へ

とて、御布施一とり給けり。二人の従僧も十二人の下僧も同じく

一つゝとりてけり

とする。この布施の受けようは貧僧にふさわしいわけだが、この後、この度の盛儀の御布施の多かつたことを比較顕揚すべく引き合いに出す、田村の帝の時の葬儀の際の布施の多さを示す話を回想するのにながらない。現に、延慶本の

田村ノ御門ノ御時タカキ御子ト申女御隠サセ給テ安祥寺ニテミワ

サシ給ケルニ堂ノ前ニサケモノ多シテ山ノ如シ其ヲ在中将ヨミ

タリケル

『平家物語』構想論のために(山下)

山ノミナウツリテ今日ニアフ事、春ノ別ヲトフトナルヘシ
に比べて、長門本の

むかし田村の御門の御時、高彦^子と申女御かくれさせたまひて後、安祥寺にて御わさせさせ給ひけるに、在中将のよみたりける

山のみなうつりて今日にあふことは春の別をとふとなるへし
は、この説話を引用した意味そのものを忘却して了っている。

渥美氏は、忠盛やその一門が、この得長寿院の造進の利生として昇進、栄華をきわめるに至ったとする説話当初の意図を長門本が欠落していることを以て、旧考⁽⁹⁾を改められた。延慶本・長門本の両本の説話の先後について、なお検討を要するし、後にも触れる所があるが、一応延慶本に、本説話が採り込まれた当初の形態を想定し、以下、延慶本に即してこの説話の意味を考えることにする。

五

得長寿院落慶供養の話のあらすじをたどると次の通りである。平忠盛が備前守であった時に、鳥羽院の御願になる得長寿院を造進した。ここまではすべての諸本に見られるが、この後に延慶本(長門本)の特異な話が始まる。落慶供養を行うにあたって、院はその導師として天台座主を指名するが、どういふわけか座主はこれを辞退する。その扱いに困却するところへ、十三人が自薦して出、そのいずれもが「種姓高貴ニシテ」、「吾ヨッ天下ノ名僧ヨッ日本無雙ノ唱導ヨト各憍慢ノ幡幢ヲタテ、」望み申すため事は困難になる。結果的には、この憍慢

の思いのゆえに十三人ともにその選にもれ、意外な方向に進むことになる。院は、思案の末、慎重に仏意を慮り、あらかじめ十四本のくじを用意して抽選により事を決めようとする。万一の慮りが当って自薦して来た十三人は全員が空くじを引き、仏の御心がこの憍慢な十三人の貴僧をとらぬことを示す。院は、ここで一転して「心ニ慈悲アリテ身ニ行徳イミシク天下一番貧シカラム僧」を導師に当てようとする。心に慈悲のあるを条件とするのは当然であるにしても、わざわざ天下第一の貧僧を当てようとする所にいさか不自然さを感じさせないでもない。しかしこれは、前の「憍慢」の「幡幢」を立てる十三人の貴僧への対比と見れば理解できよう。それに、そうした貧僧を登場させる所に、おそらくこの説話の成り立った基盤を何らかの形で示すものとも言えるであろう。

はたせるかな、院の期待通りに、蓑笠を着た乞食僧が名のり出る。この蓑笠がただものではない。すなわち、民俗学者によれば「太平洋に面した奥州の一部では……小正月の晩に来る蓑笠の神様」、ナマハギの一種であり、「古代人にとっては、一つの変相服装で……笠を頂き蓑を纏ふ事が、人格を離れて神格に入る手段であった」と言う。おそらくその最下級に位する遊行神を思わせるもので、この場の乞食僧にはふさわしいものと言える。また、この説話の成り立ちが、きわめて土俗的な世界を背景とするものであったことをうかがわせる。このように民俗に照らして見て、すでにこれがただならぬ者として、後への伏線が用意されていると見ることができるが、今の場合、この脱俗

の僧を、前の憍慢な貴僧たちと対比して描く所に、この説話の一つの意味があるだろう。この時代に多く行われ、やがて『発心集』などにすくい上げられることになる脱俗の僧(聖)をめぐる遁世説話がその根底に存在するものと思われる。それに院の指図により、問題の貧僧を尾行したところ、僧は東坂本の地主権現の大床の下に入り、その食事として松の葉を服したという。松の葉を服する話は、例えば

松の葉をくふ人は、五穀をくはねども、くるしみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びありく(『十訓抄』七)

と言うように、神仙譚とのかかわりを示す。これらから、この説話の成り立ちに、神仙めいた、遊行神のイメージの濃い乞食僧が、何らかの形でかかわりを有したことが推測される。と言うのが言い過ぎであるならば、少くともそうした乞食僧の世界やその伝承を素材に組み込んで成り立っていることは疑いないだろう。

ともあれ、供養の当日、この貧僧が二人の若い僧(実は日光・月光)と十二人の下僧(実は十二神将)を同伴して高座に着く。人々の心配に反して、貧僧の、うってかわって富楼那の弁舌を思わせる表白に人々は驚嘆する。供養が終って、御堂の正面より空中にとびり、一行の正体を示す。導師の貧僧は、実は根本中堂の本尊薬師如来であったとする所に、説話としての意味があるだろう。

言うまでもなく、この説話には、何らかの形で延暦寺とのかかわりが想定される。しかし、だからと言って、これをただちに叡山の頭場をはかる話とも即断しがたい。延慶本(長門本)の編者には、この叡

山の顯揚ともかかわりを示しながら、むしろ別の所に、この説話を持ち込んだ意図があったように思われる。それは、この得長寿院造進の功を、その造進者の忠盛よりは、むしろこれを、願主である鳥羽院の善根として説くことにあるようである。すなわち

○ 冒頭、得長寿院の造進について勸賞の行われたことを描く所で、結縁経營の大夫までもが賞を賜ったことを言い、これを「真実ノ御善根ト覺タリ」とする。この場合の「御善根」を施した主体が鳥羽院であることは、

仍天承元年^{亥辛}三月十三日^{辰甲}吉日良辰ヲ以テ供養ヲ被レ、遂畢々忠盛者

一身ノ勸賞ニハ備前国ヲ給ル其外鍛冶番匠杣師惣シテ結縁経營ノ人夫マテモホトノニ随テ勸賞ヲ家ル事真実ノ御善根ト覺タリ

という文脈から見て明らかである。

○ 導師に決った乞食僧が、使者に後をつけられるのも知らずに、地主権現の大床にもぐり、松の葉を服しながら、「サテモ目出キ法皇ノ御善根ノキヨサカナ」と感じ、山王大師に「清浄ノ御善根修行シ給ヘル法皇ヲ守護シ進セ給ヘ」と念ずる。「キヨイ」「清浄ノ御善根」がいかなる事を指すかは、やがて明らかになるであろう。すなわち、

○ 供養当日、貧僧のもとへ迎えに、公卿や高僧の使用する四方輿をよくすが、僧は「而今ハ態ト無縁貧道ノ僧ヲ供養セサセ給清浄ノ御善根也、争カ有名無実ノ虚仮ノ相ヲバ現シ候ヘキヤ」と言つて、乗るのを拒む。ここにも、前述の十三人の慚慢の貴僧との対比が見られるわけで、かれら高僧たちの日常に見られる有名無実の虚仮を排する院の姿

勢を清浄なる善根とすることが明らかである。この事からも、この説話が、単に延暦寺の顯揚を志向するものではない、むしろその基盤としては、既成の教団とは異次元の、いわば聖の世界を踏まえることが推測されよう。

○ 供養の布施として院より賜った品の多いことについて、「善根ノ志ノ深ニハ御布施ノ色ニ顯レタリ」と讃嘆する。この直後に『伊勢物語』から引かれる、高子の葬儀に関して布施の多かつたことを語る説話も、この鳥羽院の「御布施ノ色」を顯揚するために引かれたもので、その意味で、この高子の類話は延慶本の本文に即して破綻がない。

○ 供養の後、貧僧が、実は薬師如来の化身であつたことが判明するが、この薬師の加護を受けたことになる鳥羽院に關し、地の文で「世已ニ末代タリト言ヘトモ願主ノ信心清浄ナレハ仏神威光猶以嚴重也、法皇ノ御心ノ中、サコソウレシク思食ケメ」として、やはり願主である鳥羽院を讚美している。

○ この度の供養の類例として、聖武天皇による東大寺供養の話を持ち込むが、

ソレ(東大寺供養の際の不思議を指す)ヲコソ奇代ノ不思議ト承ニコレハ猶勝レタリ……今此得長寿院ヲハ……遙々昔ノ聖跡ヨリモ当伽藍効驗ハ勝レ給ヘリト万人皆所奉讚也

つまり、今回の聖儀の効驗が、聖武天皇による東大寺供養のそれよりもすぐれていること、ひいてはその願主である鳥羽院の善根の讚美に

延慶本編者の意図があると見られる。

このように、得長寿院落慶供養の話は、終始一貫して、得長寿院をその御願寺として發願建立し、更にその清浄な心のゆえに、仏意を受けて、憍慢な高僧ではなく貧道第一の聖僧を導師とした鳥羽院の、その善根を描いたものと言える。

前に推測した、この説話の成り立ちを併せ考えるならば、既成の教団ではない、民間を布教する脱俗の聖僧の立場から、鳥羽院の善根を描くものとして、この説話が成り立っている。そしてこの説話の成り立ちのゆえに、院をして、突然、天下第一の貧僧をその任に当てる。一見不自然とも見える院の決断をも描かしたわけである。

六

延慶本に即して見て来た、上述の落慶供養譚を、物語の中にどのよう位置付けるべきか。ここで改めて物語の序章から忠盛の登場までを見るならば、古態論をめぐって議論のなされている二本は次の通り描いている。

(四部合戦状本)

間近クハ大政大臣清盛入道と申ける人の有様伝承コソ不_レ被_レ及_ハ心モ
詞_ニ矣尋_ニ其ノ先祖_ヲ桓武天皇の第五ノ王子一品式部卿葛原ノ親王
の九代ノ後胤讚岐守政盛_カ之孫刑部卿忠盛朝臣之嫡男ナリ彼ノ親王ノ
御子高見ノ王は無官無位_ニ失王_ヲ其ノ御子高望王ノ時寛仁二年五月
十二日ニ始賜_ニ平朝臣ノ姓_ヲ自_レ成_ニ玉_ノ上総守_ニ以降_ヲ忽_ニ出_ニ皇氏_ニ

列_ニ人_臣其ノ子鎮守府ノ將軍良望後_ニ改_ニ常陸大丞_{國香}從_ニ國香_ニ
貞盛維衡政度政衡政盛六代_ハ雖_ニ為_ニ諸_國ノ受領_ニ未_レ被_レ許_ニ殿上_ノ仙
籍_ヲハ(忠盛の明石の詠あり)忠盛亦_ニ為_ニ備前守_ニ之時鳥羽院の御願
造進得長寿院一起三十三間御堂_ニ奉_レ居_ニ一千一鉢の仏_ヲ天承元年三
月十三日供養勸賞蒙_レ賜_ニ闕_國之由_ヲ仰_レ賜_ニ但馬_國之上_ハ禪定
法皇叙感不_レ堪_ヘ御在_ヲ被_レ免_ニ内_ノ昇殿_ニ

(延慶本)

彼ノ先祖ヲ尋_ニハ桓武天皇第五皇子一品式部卿葛原親王九代ノ後胤
讚岐守正盛孫刑部卿忠盛朝臣嫡男也彼ノ親王ノ御子高見ノ王無官無
位_ニシテ失給_ニケリ其御子高望ノ親王ノ御時寛平二年五月十二日_ニ
初_テ平ノ朝臣ノ姓ヲ賜_テ上総介_ニ成給シヨリ以来忽_ニ王氏_ヲ出_テ人_臣
ニ烈_ル其子鎮守府將軍良望後_ニ常陸ノ大丞國香ト改_ム國香ヨリ貞盛維
衡正度正衡正盛ニ至_ルマテ六代諸國ノ受領タリト言_ヘトモ未_タ殿上ノ
仙籍_ヲ不_レ聽_レ

忠盛朝臣備前守タリシ時鳥羽院御願得長寿院ヲ造進_シ三十三間ノ
御堂ヲ立_テ一千一体ノ聖観音ヲ奉_ニ安置_シ中尊文六_{等身千鉢}仍_ニ天承元年三月十三日
甲 吉日方辰ヲ以_テ供養_ヲ被_レ遂畢_マ忠盛者一身ノ勸賞_ニハ備前國ヲ給_ル

見るように、高望王から正盛へと平氏の系図をたどって、この六代が
代々諸國の受領にとどまったことを言い、続く忠盛に至って地下から
殿上へと昇進をとげたことを描き、その契機として得長寿院造進の功
のあったことを位置付けるものと言える。この時代らしい、院と受領
との結び付きを示すのにふさわしい話と言える。ちなみに、覚一本

は、卷十二に、大地震によりこの平氏昇進の直接の契機をなした得長寿院も崩壊したことを言う。覺一本の構成によれば、この前、重衡の処刑を以て平氏の討伐を描き了えたところで卷十一を終る。卷十二は、天下が一応の平穩をえたところへ、平氏の怨霊によるものかとして、大地震を描き、この大地震による問題の得長寿院の崩壊を描いていて象徴的である。こうした物語の構想と、延慶本に見たような、忠盛ならぬ、願主鳥羽院の善根として位置付ける落慶供養譚とは、構想・文脈の上から見て必ずしもスムーズにはつながらない。これが一つ。

それに、得長寿院造進の功に対し、忠盛に勳賞が行われるが、延慶本によれば、当説話のはじめの部分に「一身ノ勳賞」として備前国を賜ったとする。当時備前守であった忠盛が、ここで重ねて備前国を賜ったとすることについては今はおくとして、供養譚を終った後に、

鳥羽禪定法皇勳感ニ堪サセ御座ズ忠盛ニ但馬国ヲ給ル上年三十七ニ
テ内昇殿ヲ聴サル

とする。この「勳感」とは、この叙述の直前にある供養の盛儀とその不思議に対する勳感ではない。更にその前の、忠盛の造進の説に対する勳感と解される。その意味で、この記述の前にある落慶供養の説話そのものが後の加筆になるものと見得る可能性が十分にある。しかも現実には供養譚を挿み込んでしまったために、話を元にもどすべく、問題の、一見して重複とも解し得る勳賞の記事をここにも書いたと考える得よう。ちなみに長門本は、この落慶供養と忠盛昇進とのつながりの悪さを気にしたものか、

『平家物語』構想論のために(山下)

忠盛朝臣、か様に(薬師如来の加護がある程)仏意に相叶ふ程の寺造営す、仍て勳賞には欠国を給ふべき由仰下さる

として、一応、薬師靈驗譚に連接するよう処理を行っている。しかしながら、これでは、御願寺を造進した、その事への院の勳感とは微妙にずれを示す。そのため、重ねて

凡国の費ひ民の煩にも不_レ及、僅に一兩年の間に、成風の功を得たりけるによりて、禪定法皇猶勳感にたへさせおはしまさず折節但馬国の明きたりけるうゑ□□忠盛とし三十七にして内昇殿を許さる(傍線筆者)

として、造進の功その事への勳賞を記すことになったのであろうか。それにしても長門本のこの一文はいささか明解さを欠くが、ともあれ、長門本をしてこのような処理の必要を感じさせる程、延慶本の文脈には浮き上りのあることが言えよう。これが一つ。

それに延慶本は、いわゆる「吾身榮花」に当る部分に、忠盛の七人の子息の昇進を描いて、その昇進を「此モ直事ニ非ス得長寿院ノ御利生ノアマリトゾ覚ル」とし、更にその忠盛が仁平三年、眠るが如く往生をとげた事についても「今生ハ一千一鉢ノ仏ノ(つまり、得長寿院落慶供養譚ではなく、やはり造進した寺自体をとりあげ、その造進・造仏の)利益ヲ蒙リテ一天四海ニ榮花ヲ開キ終焉ノ暮ニハ三尊ノ来迎ニ預テ九品蓮台ニ往生ス」とする。つまりその一門子息の昇進や自らの往生をもこの得長寿院を造進した功によるものとする。院の勳感によるものではなく、むしろ得長寿院造進その事の仏の利生によるもの

とするわけである。ここにもすでに、物語本来の理解のし方とずれを生じているし、それにその利生の内容も、薬師如来のかかわる供養の盛儀ではなく、得長寿院を造進し、一千一体の仏を造りまいらせたことに對する利生である。つまり利生譚としての文脈からも、問題の落慶供養譚そのものは、前後の文脈から浮き上りを示している。これが一つ。

このように、延慶本（長門本）に見られる、薬師如来のかかわる鳥羽院の善根譚は、文脈上、忠盛の昇進を得長寿院造進の利生によるものととらえる文脈からも、更には忠盛の造進の功に對する院の叙感のゆえにとらえらる方からも浮き上りを示していて、後の増補と見べき可能性が濃厚である。鳥羽院の善根を説き、更に得長寿院造進の功を忠盛にとつて利生とするとらえ方を唱導性と考えるならば、少くともこのような唱導性を、『平家』本来の構想になるものと見るには、かなりの疑問があると言うべきであろう。

七

延慶本に限らず、いわゆる増補系諸本¹⁴には、唱導的世界の外にも、このように構想論上から見た場合の浮き上りが見られる。問題の延慶本、および源平闘諍録について、そうした増補加筆を行わせる状況があったことを指摘しておいた。¹⁵

ところで、例えば、すべての諸本に見られる「蘇武」説話のような場合はいかがであろうか。この説話も、その前後の叙事展開から見

て、いわゆる傍系説話に属する。しかしながら、この蘇武説話は、その前の、鬼界島流人の康頼の卒都婆流しからその類話として想起されたものであり、それは、一見、叙事の本筋から浮き上るかに見えながら、この蘇武説話を受けて、この度の康頼の卒都婆流しも、いずれは蘇武の雁札の故事同様、その効を奏すであらうと予言するものとしてある。つまりこの蘇武説話は傍系説話でありながら、叙事展開上、本筋へと収斂するものとして構想されている。叙事展開の一樣式と言うべきであろう。その意味で、例えばこの蘇武説話のような場合を、問題の延慶本の得長寿院供養譚と同次元のものとは言えない。

八

『平家物語』の評価をめぐって、その成り立ちを見るべく構想をたどる場合、どうしても諸本の比較から原態を推定する作業を行わねばならない。そのために、最近、議論の盛んな延慶本については、それこそ多角的な検討が必要であるけれども、まず、上述したような構想論¹⁶の上からも、種々に問題個所があり、何よりもこれらをどのように読み、物語の中に位置付けるかによって、『平家』の主題論は大きく変って来ることを銘記したい。迂遠な方法に見えるが、こうした検討を抜きにしては、十全な評価は望めないというのが、『平家』論の現状ではあるまいか。

注

- (1) 昭和五十一年三月 学生社刊。その第四章「作品評価の系譜とその問題点」参加者は、栃木孝惟・水原 一・杉本圭三郎・梶原正昭の四氏に山下である。
- (2) 赤松俊秀・水原 一両氏の一連の延慶本論と、これに対する佐々木八郎氏らの論争が耳新しい。山下がその一応のまとめを「平家物語の原態をめぐる問題について——諸説の展望——」(『名古屋大学教養部紀要』18 昭和四十九年三月)に行ったが、その後もなお問題提起が続いている。
- (3) 武久 堅氏(『畠山物語』との関連——延慶本平家物語成立過程考——『文学』昭和五十一年十月など)は、関連諸本の中でも伝承の間の風化を経ない延慶本について、その出典分析から三次にわたる編成過程を想定する。砂川 博氏(『義仲拳兵説話の生成——延慶本平家物語の場合——』『文学』昭和五十一年五月など)は、延慶本・長門本に、それらを支えた在地の語りを探る。
- (4) 戦後の『平家』論は、おおむねこれに属すると言えるし、特に構想論からの読みとしては、佐々木八郎氏らの読みがあげられよう。諸本論をからめつつ、「平家記」などの記録や歴史物語、あるいは史論書などとの関係を考える今成元昭氏(『平家物語流伝考』昭和四十六年) 栃木孝惟氏(『シンポジウム平家物語』での発言)らの論も、この系列に分類してよいだろう。わたくしの見通しもこの見方に属する。
- (5) たとえば小林美和氏(『平家物語古態性試論』『伝承文学研究』昭和四十八年十二月)・「延慶本平家物語の編纂意図とその形成圏について」『国語と国文学』昭和五十一年一月)の論がその典型であろう。ここで小林氏の推論の過程をわたくしなりにたどるならば、水原氏の、延慶本をより所とする立場からの四部本をめぐる本文批判を契機とし、氏のいわゆる史的風土性が四部本よりも延慶本に濃厚であるとする。水原氏の提起した四部本批判を、史実性(信太 周氏の指摘)とは限定し難い史的風土
- 性を基準に本文批判の立場を打ち出したもので、山下がいささか不明瞭であった史料類への接近のし方に對し新しく照射の視角を設定したものと評価される。氏の指摘するように、この史的風土性については、確かに延慶本の方が濃厚な面があり、四部本にはいささか集約された痕跡をなしとしない。この事から、まず延慶本に古態を想定した上で、その延慶本に唱導的な原『平家』の主題を想定して行くようである。ただ卒直に言って、延慶本の、より濃厚な史的風土性をそのまま原態当初のありようで見得るかどうか、むしろ第二次の段階でも史的風土性を持ち込むことが皆無だったとは必ずしも言えない(例えば、山下「記録者と物語作者——想像力の問題——」『国文学』昭和五十一年九月)。もっとも小林氏の主題論には、最近、更に多少の変化が見られるように思われる(昭和五十一年度中世文学会秋季大会口頭発表「延慶本平家物語の説話構成について」)。
- (6) 例えば巻一「鱷」にて、忠盛の先年の体験を引用に及ぶ『金葉集』撰集のあった天治元年などは、今は問題外とする。
- (7) 「源平盛衰記に関する一考察——別記文について——」(『名古屋大学軍記物語研究会 会報』2 昭和四十九年二月)・「源平盛衰記の研究」(『名古屋大学大学院生論集』4 昭和四十九年五月)
- (8) 「延慶本平家物語の特殊な性格——ぬきさしならぬ重要な説話の存在について——」(『説林』23 昭和四十九年十二月)
- (9) 「説話形成についての一考察——平家物語長門本の得長寿院供養譚をめぐって——」(『文芸研究』42 昭和三十七年九月)
- (10) 柳田国男氏「をがさべり——男鹿風景談——」(『東京朝日新聞秋田版 昭和二年六月』)
- (11) 折口信夫氏「国文学の発生」
- (12) 堀 一郎氏「我が国民間信仰史の研究」(一) 昭和二十八年十一月
- (13) 四部本のこの形態は、「受領たりしかども殿上の仙籍をばいまだゆるされず」しかるを今三十六にてはじめて昇殿を許された、という平氏の

名古屋大学文学部研究論集（文学）

登場を描く歴史観に裏打ちされた密度の高い手法が稀薄である。おそろく原態当初の形ではあるまい（山下「平家物語評釈三 殿上闊討」）

『解釈と鑑賞』昭和四十三年六月。

(14) 渥美かをる氏「平家物語の基礎的研究」の命名による。

(15) 「記録者と物語作者——想像力の問題——」（『国文学』昭和五十一年九月）

(16) 高杉恵子氏「延慶本『平家物語』小考——その存在意義について——」（『大谷女子大国文』6）にも、こうした観点からの指摘がある。